

語彙被覆率に基づいた効率的な 英語語彙学習教材の作成を目指して ～武庫川女子大学英語文化学科語彙プロジェクトチームに よる語彙力増強プログラム～

三 宅 弘 晃、西 嶋 久 雄、
辻 和 成、安 達 一 美

0. 武庫川女子大学英語文化学科語彙プロジェクト

0.1 武庫川女子大学語彙プロジェクトとその目的

武庫川女子大学語彙プロジェクト（以下、語彙プロジェクト）は、武庫川女子大学英語文化学科・三宅弘晃、西嶋久雄、辻和成、安達一美によって構成された3年間の学科内プロジェクトである。

語彙プロジェクトの目的は、語彙研究を通じて効率的な語彙学習方法を得、語彙学習教材を提供することにより、武庫川女子大学英語文化学科（以下、大学）および同短期大学部英語コミュニケーション学科（以下、短期大学）所属の学生たちの実践的な英語力を語彙の面から底上げすることである。

0.2 語彙プロジェクトの年次予定と期待される効果

プロジェクトを立ち上げるにあたり、年次計画を次のように立てた。

平成21（2009）年度は、大学および短期大学所属の学生たちの英語力・語彙力の現状把握のためのリサーチを行い、効率的な語彙学習方法確立を目指した理論を構築することを目標とする。平成22（2010）年度は、前年度に得られたデータの分析とそれに基づいて得られた理論をさらに検討すると同時に、学習教材の作成にもとりかかる。平成23（2011）年度は、学習教材を完成させるとともに、それを授業や課外で利用できるようにする。

なお、本プロジェクトの成果として、語彙学習の理論に関する論文の執筆、

語彙学習を目的とした書籍の出版、e-learning による自律学習支援システムの確立などを見込んでいる。これらの成果は、教員側においては大学・短期大学の学生たちの語彙指導法の確立に繋がり、学生側においては自己表現に必要な英語力を底上げすることに役立つと期待される。

1. 英語語彙学習の問題点と課題

1.1 ターゲットとなる英語学習者とその現状

効果的な英語語彙学習方法を求めるにあたり、語彙プロジェクトがまず把握しておかなければならないのは、英語学習者（L2 話者）である大学あるいは短期大学の学生たちが入学時に持っている平均的な語彙サイズである。本研究では、被験者として平成21（2009）年度4月短期大学入学生（112名、うち後述の予備テストを受験した者104名）を選んだ。

文部科学省の高等学校学習指導要領（平成11（1999）年3月告示、14（2002）年5月、15（2003）年4月、15年12月一部改正）によると、学生たちは中高6年間で最低2,200語（うち高校では1,800語）の語彙を学習することになっている。Nation（2001）によると、上位2,000の最頻出語 *most frequent word* を受容語彙 *receptive vocabulary* として持つ被験者は、話しことばに出てくる単語の90%を理解できる。つまり、中高で学習する語彙が出現頻度に厳密に基づいて選ばれておりさえすれば、2,200語という語彙サイズは簡単な英語会話程度では十分であるという主張もできる。

一方、受容語彙の推定される大きさにも関わらず、学生の留学記録などにも見られるように、日常の英語使用にも困難を感じている者も少なくない。このことは、例えば、簡略化されていないテキストを L2 話者が問題なく読むためには、受容語彙サイズについては最低でも最頻出語3,000を持たなければならないとされ（Laufer 1992）、また、教育のある大人の英語 L1 話者 *adult educated speaker* の〔受容〕語彙サイズは10,000から60,000語の間であるとされ（Crystal 1995）、おそらく17,000語前後であると推測される（Goulden et al. 1990）ように、2,200語という語彙サイズは、L2 話者が大きな問題がなく意思疎通をするためには不十分である可能性を示唆する先行研究の記述とは必ずしも矛盾しない。

また、上に述べた Nation がさらに指摘したように、テキストに現れる95%の語彙が既知でなければ、テキストの大意を損なうことなく残りの5%の語彙の意味を正しく推測することができないため、実践的にはかなりの語彙を知っておく必要があるという主張もある。さらに、L1 話者が持つ語彙と日本人学習者に求められている語彙そのものにギャップがあり、日本人は通常の英米人にとっての「難しい語彙」を学んではいるものの、実践的なコミュニケーション能力を高める上では「余分なもの」に労力を費やしているとの主張 (Browne 2008) も注目に値する。以上の考察は、学習すべき語彙リストの質の重要性を示唆するものである。

なお、上述の研究結果は、明示的にせよそうでないにせよ、受容語彙を前提としており、表現語彙 *productive vocabulary* のサイズについては考慮されていないことにも留意する必要がある。

1.2 効率的な語彙学習とは～語彙サイズと語彙被覆率

前節の議論をふまえて、受容語彙・表現語彙に関わらず語彙サイズを単に増大させることが、実際の英語運用 (コミュニケーション) を円滑に行えるようになるための十分条件ではないことに留意する必要がある。また、アメリカ・ワシントン州にあるムコガワ・フォートライト・インスティテュート (以下、MFWI) への留学が学生全員に課せられている本学では、入学から留学までの限られた期間 (大学は約1年、短期大学は約半年) で、留学で経験するコミュニケーションに最低限必要とされる語彙をいかに効率的に習得するかということが現実的な問題となっている。もちろん、このような特殊な理由の有無にかかわらず、語彙学習が効率的であるということは一般的にも望ましいものである。

このように学習時間対効果を求めるとき、漫然と語彙サイズの増大を図るよりもむしろ、学生が実際にコミュニケーションを行う言語使用域での語彙被覆率 *vocabulary coverage* を上げることが必要である。語彙被覆率 C_v は、学習者が持つ語彙数を V_i とし、基準となる語彙リストを V_j とすると、以下のような式で一般に表すことができる (Fengxiang 2008)。

$$C_v = \frac{V_i \cap V_j}{V_j}$$

この式により、被験者の C_v は 0 から 1 までの数値で示される。例えば、高等学校学習指導要領で指定された 2,200 語 ($V_j = 2,200$) のうち 1,980 語 ($V_i \cap V_j = 1,980$) を受容語彙として持っている学生の語彙被覆率 C_v は、0.9 である。実際の言語活動を反映した十分に優秀な語彙リスト V_j (例えば、West (1953) の the General Service List における 2,000 語や、Coxhead (2000) の the Academic Word List による 570 語の拡張、または後述する JACET 8000 による 8,000 語のリストなど) に基づいて求められた C_v の値は、その被験者の実践的なコミュニケーション能力 (あるいは語彙学習の到達点) を測るひとつの指標として用いることができる。

1.3 効率的な語彙学習

以上の議論から、被験者の語彙サイズを拡張していくのではなく、学生の実際のニーズに合致した語彙リストに対する語彙被覆率を上げることが効率的な学習には欠かせないことがわかる。もちろん (受容) 語彙被覆率の高さが、例えば被験者の構文力やコロケーションに関する知識のようなものの向上までも保証するわけではないという指摘は無視できない。しかし、上述した Nation の指摘にもあるように、学生が実際に読むテキストに現れる単語に対する語彙被覆率が十分 (0.95 程度) 高ければ、未知の語の意味を推測してテキスト全体の流れを損なわず理解できるようになるなど、学生のコミュニケーションを容易にするという実際的な利点を見込むことができるため、語彙被覆率を向上させることは注目に値する学習戦略であると考えられる。

よって、語彙プロジェクトの当面の課題として、以下の 3 つの点が挙げられる。(a) 学生の語彙力の現状を把握すること、(b) 学生が実際に触れるテキスト (とくに authentic text) を反映した語彙リストを得ること、(c) (a) の現状と (b) の理想との乖離がどの程度であり、それをどう克服するかを考えること。この課題を考察・解決するため、次章で述べるように、学生が持つ語彙力の現状把握を行うことから研究を始めた。

2. 現状把握のための予備テスト作成と結果分析

2.1 予備テストの目的

第1章で述べた学生たちの語彙力を把握するためのテスト（以後、予備テスト）を作成した。この予備テストは、学生の現在の語彙サイズを推定し、被験者に基本語彙リスト V_j の適正サイズを決定することを目的として行われるものである。

このテストは、学生たちが持つ平均的な受容語彙サイズのみを調査対象とした。理想的には、受容語彙・表現語彙両方のサイズを厳密に測定すべきである。しかし、テストの方法により多少の違いは生じるものの、受容語彙と表現語彙サイズの間には一定の相関関係があり（Webb 2008）、例えば L1 話者に限っていえば受容語彙は表現語彙よりも25%程度多いと想定してよい（例えば、Minkova and Stockwell 2008参照）。また、受容語彙・表現語彙に関わらず、サイズを厳密に測定することが最終的な研究目的となるのではない。以上をふまえて、被験者に対して次節2.2に述べるようなデザインに基づいた予備テストを実施した。

2.2 予備テストのデザイン

2.1.1 予備テストに使用した語彙

予備テストに用いる語彙は、『大学英語教育学会基本語リスト』（*JACET List of 8000 Basic Words*、通称 *JACET 8000*）に基づいて選定した。この基本語リストの語彙は、大学英語教育学会の基本語改定委員会が日本人英語学習者の教育語彙表を作成することを目標に選定されたもので、*British National Corpus* (BNC) から基準データを作成し、*JACET 8000* サブコーパスデータと照合して、教育的観点から調整して頻度順に8,000語が選定されている。

JACET 8000 サブコーパスデータは、検定教科書、雑誌・新聞、映画、児童文学、BBC・CNNなどのスクリプト、センター試験、英語検定試験（STEP）・TOEFL・TOEICなどの資格試験などから出現頻度データに基づき作成されている。このコーパスデータは、Kilgariff レマリストによってレマ化 lemmatization がされており、語の活用形や変化形は基本形が採用されている。

同一語形で語源や品詞が異なる場合は、別見出し語とはしていない。イギリス英語とアメリカ英語で語形が異なる場合は、アメリカ英語を採用している。また、複数の語形を持つ語に関しては、最も使用頻度の高い語形に統一している。なお、数詞・序数詞、大文字で始まる固有名詞等、曜日名、頭文字語はリストから省かれている。

2.2.2 予備テスト

予備テストは、テスト対象となる語の語義を問う問題で、語義を日本語または英語で与える 2 形式を作成した。語の選択にあたり、*JACET 8000* の上位 5,000 語レベルまでを 1,000 語ずつ区切り、Level 1（上位 1,000 語まで）から Level 5（上位 4,001-5,000 語まで）までの 5 レベルより各 20 語の計 100 語を無作為に選出された。各レベルの 20 語は 2 分割され、10 語は日本語で書かれた語義を問う問題（日本語語義形式問題、以下 J 問題）に、残りの 10 語は英語で書かれた語義を問う問題（英語語義形式問題、以下 E 問題）に使用した。問題形式は、各レベルの 10 語を品詞により大まかに 2 グループに分け、それぞれのグループに誤答 3 つを含む 8 つの選択肢が与えられたもので、被験者は各レベルの 5 語の問題に対して 8 つの選択肢から最も適切な語義を選んでマークシートに解答することになる。したがって、J 問題の問題数は質問の語が 50 語で選択肢が 80 となり、E 問題の数も同様に質問の語が 50 語で選択肢が 80 となる。選択肢として挙げられる語義に関しては、J 問題は『ジーニアス英和大辞典』（大修館書店、第 4 版）から、E 問題は *Longman Dictionary of Contemporary English* (Pearson Longman, 1st revised edition) から、語義の第 1 義のものを採用した（末尾の資料参照）。

予備テストを作成後、今回の被験者以外の学生群にこのテストを受験させ、J 問題と E 問題のそれぞれに要した時間を測定し、被験者に対する予備テストの実施時間を J 問題 15 分、E 問題 30 分と設定した。

予備テストの被験者は、短期大学 1 年生 104 名である。この予備テストは、2009 年 6 月 6 日第 2 時限に開講された「初期演習」において、被験者に対して一斉に実施された。

2.3 予備テスト結果分析

2.3.1 分析方法

予備テスト結果の分析には、各レベルに含まれる語彙数1,000に正解率を掛けた値を用いた。例えば、ある被験者が Level 1（上位1-1,000語）で80%、Level 2（上位1,001-2,000語）で70%、Level 3（上位2,001-3,000語）で50%、Level 4（上位3,001-4,000語）で20%、Level 5（上位4,001-5,000語）で10%の正答率があれば、それぞれのレベルの正解率から得られた値を積算（ $1,000 \times 0.80 + 1,000 \times 0.70 + 1,000 \times 0.50 + 1,000 \times 0.20 + 1,000 \times 0.10 = 2,300$ ）し、その被験者の推定受容語彙サイズ *estimated receptive vocabulary size* を2,300語とした。被験者は、J問題とE問題の二つの形式のテストを受けているので、問題タイプ別推定受容語彙サイズと被験者のTOEICスコアとの相関を調べた。TOEICスコアについては、被験者が2009年5月中旬にTOEIC-IPテストを受験したときのものを利用した。なお、予備テストを受けたのは104名であったが、比較のためのTOEICスコアを持たない者2名を除外し、分析には102名のデータを使用した。

2.3.2 各レベルの正当率

図1は各語彙レベルの正答率を問題別（J問題・E問題）に比較したものである。この図からJ問題もE問題も語彙レベルが上がるにしたがって正答率が下がる傾向が全般的に見られる。ただし、E問題の3,000語レベルだけは、2,000語レベルより正答率が高くなっている。

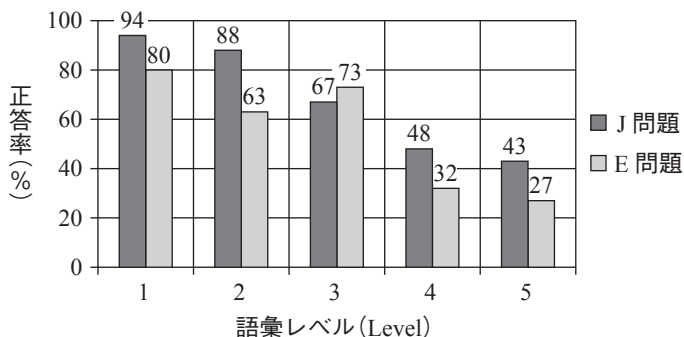


図1 J・E問題と各レベルの正答率

2.3.3 推定受容語彙サイズ

J問題の結果から推定される被験者102名の平均受容語彙サイズは3,398語、E問題については2,743語であり（表1）、J問題はE問題に比べて約25%高い推定受容語彙サイズを示している。問題形式は語義の説明に日本語や英語を使用した以外は同じであるので、本来ならば、両方とも同じ程度の語彙サイズが予測された。しかし、被験者の大半（91%）において、J問題の方が高い正答率を示した。この違いにはさまざまな要因が考えられるが、一つには多くの被験者の受容語彙知識が「英単語＝日本語訳」（英語の単語一つにつき日本語訳一つ）という単純な形で記憶されており、英語による語彙説明から単語を推測するという作業には慣れていなかった可能性がある。このように、本研究の予備テストにおけるJ問題とE問題の結果の違いは、被験者の受容語彙知識がその一部しか捉えていない可能性を示唆していると考えられる。

表1 J問題・E問題正答率に基づく推定受容語彙サイズ

	J問題	E問題	J & Eの平均
推定受容語彙サイズ	3,398	2,743	3,086
正答率の比較	91%（J問題＞E問題） 9%（J問題＜E問題）		

2.3.4 レベルと学生数の割合

図2は各語彙レベルの人数と全体の被験者数（102名）の比を算出したものである。J問題に基づく結果は、被験者の半数以上（58%）が3,000語（2,001

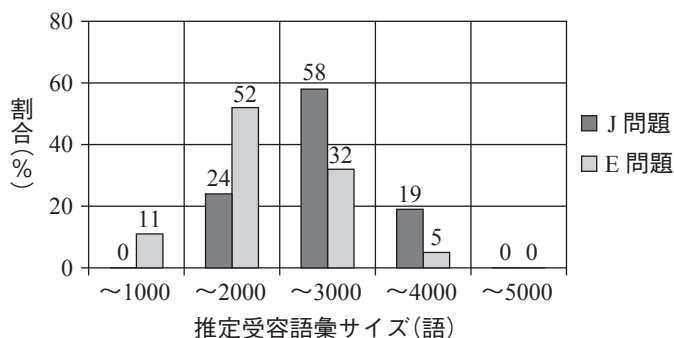


図2 語彙レベルの割合

～3,000語）レベルである。残りは2,000語レベルに24%、4,000語レベルに19%いる。またE問題では、最大のグループはJ問題より1レベル下の2,000語レベル（52%）となっている。次に多いのが3,000語レベル（32%）である。今後はE問題においてもJ問題結果に近づくような学習が必要であると考える。

2.3.5 TOEIC スコアと被験者語彙レベルの相関

次に被験者の TOEIC スコアと語彙レベルとの間にどのような関係があるかを検討する。J・E 問題形式別に、リスニングセクション、リーディングセクション、TOEIC スコア（合計）それぞれの相関を求めた

表2 TOEIC スコアと語彙レベルの相関

	J 問題	E 問題
リスニング	0.35	0.24
リーディング	0.64	0.60
TOEIC 合計	0.56	0.47

N=102

（表2）。リーディングおよびTOEIC 全体とJ・E 問題それぞれの比較においては、中程度の相関（ $r=0.64$, $r=0.60$ ）が見られたが、リスニングとの相関（ $r=0.35$, $r=0.24$ ）はあまり見られなかった。これは視覚的な語彙知識は、視覚情報を読み解くリーディング時にある程度有効に働いていることを示しているようである。また、リスニングスコアとの低い相関は、音声情報を伴った語彙知識の不足を示しているのかもしれない。

次に、TOEIC スコアの上位および下位約25%（約25名）をそれぞれ上位群、下位群とし、問題別語彙レベルとの相関を調べた。表3はTOEIC スコア全体と語彙レベルの比較、表4はリスニングスコアと語彙レベルの比較、表5はリーディングスコアと語彙レベルの

表3 TOEIC スコアと語彙レベルの相関

TOEIC 合計	問題形式	N	r
上位群（405↑）	J	24	0.50
	E		0.51
下位群（300↓）	J	25	0.16
	E		0.18

表4 リスニングスコアと語彙レベルの相関

リスニング	問題形式	N	r
上位群（235↑）	J	27	0.24
	E		0.26
下位群（160↓）	J	24	-0.06
	E		0.03

比較をそれぞれ表したものである。

表3によると上位群のTOEICスコアとJ問題・E問題それぞれの間に中程度の相関が見られる。しかしながら、下位群の場合は、ほとんど相関が見られない。上位群においては、語彙レベルの要素がTOEICスコアを高めるためには重要な要素の一つであるかもしれない。

表4および表5はTOEICの各セクションとの比較であるが、リスニングスコアと語彙レベルとの相関はいずれのグループにおいてもほとんどないに等しい(表4)。

表5 リーディングスコアと語彙レベルの相関

リーディング	問題形式	N	r
上位群 (170↑)	J	27	0.45
	E		0.53
下位群 (120↓)	J	25	0.51
	E		0.37

一方、リーディングと語彙レベルの相関については、下位群におけるE問題の低さは多少目立つものの、どちらのグループにおいても中程度の相関を示している(表5)。

3. 今後の展開

3.1 習得すべき語彙のレベル設定と語彙学習プランについて

前章で得られた予備テストの結果に基づき、短期大学生の平均的な語彙力は高等学校学習指導要領が指定するサイズより少し大きい程度であることが推測された。これは、日常会話に出てくる90%近く(Nation 2001)、あるいはGraded Readers Stage 3の91.1%以上(JACET 8000)は十分カバーできていると期待させるものではあるが、一方で自律学習 independent learning に必要となる4,200語のレベル(Browne 2008)には及ばない。また、J問題とE問題の結果の差にも表れているように、受容語彙の中身の充実という課題もあるようである。

このことから、語彙プロジェクトは、語彙習得に以下のとおり3つのレベルを便宜的に設けた。

学生全員が身につけるべき語彙セット（必修）

(a) Basic level …2,500語

(b) Intermediate level …1,700語（合計4,200語）

学生個人のニーズに合わせて身につけるべき語彙セット

(c) Advanced level …各人の目的によって決定される

まず、(a) Basic level は高校課程修了時に期待される習得レベルである。短大において半数以上の学生はこの段階をクリアしていると考えられる。このレベルに達しない場合、短大の授業履修に支障を来することが予測されるため、リメディアル教育の対象となるといったプレースメントテストとしてもこのレベルの語彙を用いることができるであろう。

次の (b) Intermediate level は、自律学習に必要な語彙を習得していると考えられるレベルである。上位の短期大学学生は1年次修了時に、また全ての短期大学学生が卒業までに、このレベルにまで達することが望まれる。これには、キャリアを積みながら自らの力で英語力を伸ばすために最低限必要な語彙が含まれることになる。以上は、全員必修の語彙である。

さらに、(c) Advanced level は、学習者がそれぞれのニーズ（短期大学・大学の上級学年におけるカリキュラム、ディスコース・コミュニティ、キャリアなど）を定めたうえで、それに応じて必要となる専門色の強い語彙を自律的に選択して拡張する段階である。このレベルの学習には、学習者側には明確な目的意識と自主・自律性が必要となり、指導者側には学習者の多様なニーズに対応できる柔軟性が求められる。ただし、本学英語文化学科および短期大学部英語コミュニケーション学科特有の事情として、全員参加の留学プログラム（MFWI）に必要な一部の語彙を前倒して学習するといったように、教育機関やカリキュラムの都合によって学習の順序を多少前後させる配慮も不可欠である。

以上のような語彙のレベル分けにより、語彙学習プランを立てることが容易になる。例えば、専門課程で言語学を学び、将来ツーリズム関係の職に就きたいと思う学生には、次のような語彙学習プランが勧められる（図3参照）。

この学習プランにより、いくつかの利点が期待される。まず、学生側の利

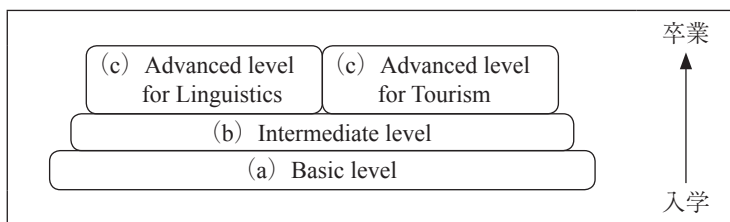


図3 専門課程で言語学を学び、将来ツーリズム関係の職に就きたい学生のための語彙学習プラン（ただし、MFWIに必要なものなど前倒した学習が必要な語彙はのぞく）

点として、学びの段階を意識することが可能になる。また、自らのニーズを明確に持ち、それに向けての具体的な準備を自立的に行うための動機付けとして活用することができる。一方、指導者側の利点としては、とくに Basic, Intermediate level で供給される語彙とカリキュラムとの連携を密に取ることで、授業で最低限必要となる語彙を学生に提示することが可能になる。また、学生個人の学びの段階を「学習診断カルテ」などによって学生と共有することで、レベルに応じた指導教材を適宜提供することができるようになる。さらに、Advanced level においては、e-learning などて教材を作成することにより、個人のニーズにあった効率的な語彙教育を行うことができるようになる。

3.2 英語学習教材の開発に向けて

上述の学習プランを踏まえ、語彙力強化のステップは、原則、「必修語彙」（Basic level + Intermediate level）から「目的別語彙」（Advanced level）へと進むかたちをとる。これは、語彙被覆率を基にした学習から English for Specific Purposes (ESP) の観点からの学習へ移行する逐次的アプローチであり、また大学英語文化学科にて平成21（2009）年度より動き始めた「系」制度（大学生は、3年次より「文化・文学系」「言語・語学系」「ビジネス・コミュニケーション系」のいずれかを選択する）とも連動するかたちである。どちらも実際の言語活動を反映した語彙習得を目指すものであり、そのため、学生の進路を反映させたディスコース・コミュニティを優先的に選択することを計画している。具体的には、グローバル企業での総合職を念頭に置いた職種という切り口やツーリズムをはじめとしたホスピタリティ産業などを検討中である。

MFWI は、英語教育専門のアメリカ人教員約25名を有する本学の分校であり、春学期のレギュラープログラム（約 4 ヶ月）では大学英語文化学科 2 年生全員が、秋学期のレギュラープログラム（約 4 ヶ月）では短期大学部英語コミュニケーション学科の 1 年生全員が留学する。したがって、これらのメインプログラムに参加するにあたり、学生たちが学習成果を最大限引き出せるような内容の語彙学習の具体化を当面の課題として位置づける。

その実現のため、平成22（2010）年度は、前年度に得られたデータの分析とそこから得られた理論の検討を進めることにより効率的な語彙習得のためのストラテジーの構築を目指す。同時に、MFWI 教員との連携をとりながらニーズやジャンル分析を実施することにより、authentic な内容の English for Overseas Studies (EOS) 教材作成を進める。そして、最終年度には、EOS 教材の完成と教材使用の実践方法の確立を目指す。

3.3 学習者の自律を促すための手段

自律学習に必要な4,200語（Basic level + Intermediate level）から専門的な目的のための語彙（Advanced level）へ着実に移行していくためには、効率的な語彙習得のためのストラテジーの一環としての学習者の自律学習を促進する必要がある。その具体的な方法としては、効率的な語彙習得のための自学自習方法の確立が重要な役割を担う。その具体化のため、本プロジェクトメンバーのそれぞれの専門と研究を有機的に連動させた語彙習得方法の検証を計画している。同時に、自律学習を定着させる手段として、若者の間で急速に普及しているポータブルオーディオ機器（iPod, 携帯電話など）を活用した自学自習の方法についての調査も進める計画である。また、中長期的な視点から語彙力強化を図るためには、自律学習をサポートする e-learning 環境の整備と学習プランに沿った学習コンテンツの充実も必要である。

具体的に語彙習得方法の検証を進めるにあたり、まず「クイック・レスポンス」、「リテンション」と「シャドーイング」の手法を取り入れた学習方法の検討を計画している。これらは、元来通訳の基礎訓練で使用されている方法である。「クイック・レスポンス」では、一定の間隔で流れてくる起点言語（単語）を一語や二語遅れで目標言語に直すという練習を行う。「リテンション」では、文章を聞いて正確に復唱する練習を行う。「シャドーイング」とは、例

例えば、英語のスピーチを聞きながら数秒遅れで追いかけるという練習である。これらを語彙習得に活用した場合の理論的な検証と最適な活用方法について調べる計画である。

4. まとめ

4.1 効率的な英語語彙学習教材の作成と提供

学生の英語語彙学習教材を作成するにあたり、学生の語彙力の現状を把握することが必要となったため、本論文で述べた予備テストを実施し、現在の状況を把握することができた。この現状を踏まえ、学生が実際に触れると考えられるテキスト（とくに authentic なもの）をうまく反映した語彙リストを各レベルにおいて作成する。このようにして作成されたリストを学習することにより、学生が実際に触れるテキストの語彙被覆率を上げることが期待される。なお、このリストは、本論文で考察された手法などで直接的・間接的に学生たちへ提供される予定である。

4.2 武庫川女子大学・短期大学学生の語彙力の現状

予備テスト結果から、短大生の平均的な受容語彙サイズは、J問題により約3,400語、E問題ではその8割程度であると推測された。この違いは、受容語彙といっても一つの方法で測定できるわけではなく、受容語彙の様々な側面が存在していることを示唆している。英語力を高めるために、学習者は、E問題に見られる英語語義の理解レベルを日本語訳の知識と同程度に高めることによって、この違いを解消する必要がある。また日本語訳による英語の受容語彙知識はTOEICにおいてリスニングよりもリーディングに有効に働いているようである。

全体として2,000～3,000語レベルの受容語彙、それともかなり限定された受容語彙を被験者は身につけていると考えられる。しかし、受容語彙知識には辞書的な意味だけではなく、音声、コロケーション、文法などの情報も含まれているということに指導者・学習者ともに注意を向けなければならない。自律学習に必要な語彙サイズのレベル（本研究における Intermediate level）に到達する

ためには、学生が現在持っている語彙サイズを単純に増やすと同時に、より幅広い受容語彙知識を身に付けていくことが肝要である。指導者はそのための指導法の構築や教材を作成する必要がある。

4.3 今後の見通し～学生の語彙力を伸ばすために

今回の語彙プロジェクトにより構築、確立される語彙学習方法では、大学及び短期大学の学生の語彙力を論理的計画の下に向上させ、総合的な英語力を高めていくことが狙いである。そのためには、EOS 教材開発から得られる知見とノウハウを生かし、習熟度別に充実した「必修語彙」と「目的別語彙」の体系的な教材の作成を促進していく必要がある。その効果的な具現化を考えた場合、実際に学生が英語を使用するディスコース・コミュニティのニーズを反映させることが不可避である。また、学生のモチベーションをさらに維持するために、学生の将来、具体的には就労力強化などの中長期的な視点を持ってプロジェクトを遂行していくことが必要であると考えられる。

引用文献

- Browne, C. "Optimizing EFL Vocabulary Learning with IRT and Online Technology." 2008 AILA World Congress, 2008.
- Crystal, D. *The Cambridge Encyclopedia of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press, 1995.
- Fengxiang, F. "A corpus-based study on on random textual vocabulary coverage." *Corpus Linguistics and Linguistic Theory* (de Gruyter Mouton) 4, no. 1 (2008) : 1-17.
- Goulden, R. et al. "How Large Can a Receptive Vocabulary Be?" *Applied Linguistics* (Oxford University Press), no. 11 (1990) : 341-363.
- Laufer, B. "How much lexis is necessary for reading comprehension?" Edited by P. Arnaud and H. Bejoint. *Vocabulary and applied linguistics* (Macmillan) , 1992: 126-132.
- Minkova, D., and R. Stockwell. "English Words." *The Handbook of English*

Linguistics (Blackwell Publishing Ltd.), 2008: 461-482.

Nation, I. S. P. *Learning vocabulary in another language*. New York: Cambridge University Press, 2001.

Webb, S. "Receptive and productive vocabulary size of L2 learners." *Studies in Second Language Acquisition* (Cambridge University Press), no. 30 (2008) : 79-95.

大学英語教育学会 (JACET) 基本語改訂委員会 (編). 大学英語教育学会基本語リスト. 2003.

【資料】

1. 例・日本語語義形式問題 (J 問題)

A	1	compare	① 頭
	2	dead	② 打つ
	3	head	③ 大きいほうの
	4	performance	④ 上演
	5	white	⑤ 視力
			⑥ 白い
			⑦ 死んだ
			⑧ 比較する

2. 例・英語語義形式問題 (E 問題)

A	51	follow	① a word or sign that represents an amount or a quantity
	52	culture	② someone who is trained to treat people who are ill
	53	number	③ the beliefs, way of life, art, and customs that are shared and accepted by people in a particular society
	54	doctor	④ the group of people who govern a country or state
	55	surface	⑤ the top layer of an area of water or land
			⑥ to be sure that something is true or that someone is telling the truth
			⑦ to go, walk, drive etc behind or after someone else
			⑧ used to emphasize that a quality or situation is as great as it could possibly be